【2022 年度事業報告】　（１号議案）

（１）オルタナティブ教育研究・推進事業

協同ネットは長年学校外の子どもたちの学びづくりを行っており、その経験から武蔵野、三鷹、練馬、中野、相模原と各エリアにて居場所や学習会、相談窓口を展開してきた。現在も発足の三鷹本部を中心に自主事業であるフリースクールやソーシャルファームを運営し、そうした協同ネット全体の実践の質的向上のため、子ども若者たちの成長発達を支え時代の要請に応える実践モデルを提供している。この後の事業報告がエリアでまとめられているのに対しオルタナティブ教育研究・推進事業とは自主事業と委託事業を組みわ合わせながら協同ネットらしい実践モデルを不断に生み出しながら展開されている事業である。

①フリースクール事業

佐藤真一郎/藤井智

新型コロナウイルスの影響で、縮小せざるを得なかった活動も昨年度から再開。日々の活動の充実に各所が取り組んだ。結果、義務教育年齢の登録者数はそれほど変わらないが、日常的に通ってくる人数は大きく増加している。フリースクールを求める声は確実に広がっており、東京都が「フリースクール等に通う不登校児童・生徒支援調査研究事業」を通じて調査協力金を利用者に支払うなど、公民連携も新たな段階に向かい始めている。視察等も例年になく多い年となった。

子ども年齢	
事業計画	事業実施の報告/成果
①居場所に内包された「協同の学び」の言語化 ・コスモパンフ改定 ・FS 部会開催(3 回程度) ②公民連携のあり方追求 ・各事業行政会議 ・東京都公民連携会議 ・東京都フリースクール等ネットワーク（TFN）会議 ③保護者との協同	3 所登録者数合計：66 名（2023.3 現在）←64 名 3 所新規相談件数合計：100 名←72 件 3 所新規登録者数：28 名←28 名 3 所延べ利用者数：5,535 名 ①パンフ改定は次年度継続へ。部会の開催も 2 回に留まった。 ②各事業の連携会議に加えて、東京都の連携会議、TFN の定例会議に参加。相互評価事業に参加、TFN として都の教育庁への訪問（調査研究費についてのヒアリング）を実施。都民ファーストの会（10 月）、日本共産党（11 月）からのヒアリング。小金井市教育委員会視察（10 月）、文部科学省初等中等局視察（3 月）。 ③3 事業所で親の会を開催。
フリースペース コスモ（自主事業）	

事業計画	事業実施の報告/成果
①居場所事業の実施 ②米づくり農業体験、夏の冒険旅行等の特別活動の実施 ②学習センターとの協同（基礎学力） ③実践の言語化（パンフ作りを通じて） ④保護者とスタッフの協同	①1 日の平均来所者の増加傾向（約 20 名） 会員数：28 名（2023.3 現在）←30 名 新規相談件数：61 件←50 名 新規入会者数：10 名←16 名　　延べ利用者数：3,348 名 ②3 年ぶりの米作り農業体験（通年/長野県）、冒険旅行（8 月/四万十川）に加え、ニローネキャンプ（9 月/相模原）を実施。プログラムの計画から報告会、報告集作成までをメンバー主体で取り組んだ。 ②学習センタースタッフが主導する「学びタイム」は継続。週に 2 回。メンバーたちが自分の興味を超えたところで「知る面白さ」を感じることができる機会となっている。 ③パンフレット作りには着手できず。 ④「コスモ親の会」「保護者会」の保護者主導継続。保護者自身の交流の場（オヤ☆コス）となっている。 ⑤課題：利用者の多様化に対応した学習活動の充実化、フリースクールを認知してもらう活動（公民連携、地域）、低年齢化への対応、会員数増加によるスペースの狭さ対策、職員体制の強化（ボランティア活用含む）
居場所ぱれっと（委託事業）	
事業計画	事業実施の報告/成果
①居場所事業実施 ②地域資源を活用した学びの機会作り ③保護者が安心できる相談の場、子どもの学びをスタッフと協同して考えられる保護者会の運営 ④公民連携パートナーシップのあり方模索	①全体的に増加傾向 利用登録者数：17 名（2023.3 現在）←14 名 新規相談件数：7 件←2 件 新規登録者数：6 名←2 名 宿泊行事（夏のキャンプ）も再開。　　延べ利用者数：1,355 名 ②メンバーの興味関心をもとに「生きること」「食べること」を中心テーマに据えた。「ハンバーガープロジェクト」では地域団体、企業の協力のもと、自分たちで育てた食材（ピクルス、マスタード、大豆ミート等）を使ったハンバーガー作りを行なった。 ③親の会、進路説明会の対面実施を再開。保護者間の関係性づくりにも貢献できた。協同ネットの公開研修に一部の保護者が参加するなど協同の基盤が作られ始めている。 ④修了式にあたる「節目の会」（ぱれっとでは学習成果報告会も兼ねている）に行政関係者にも保護者、地域協力団体と共に参加してもらった。それぞれの立場から卒業生へのお祝いの言葉が述べられるなど、ぱれっとで子どもたちが成長を共に喜び合うことができた。
むさしのクレスコーレ（委託事業）	

事業計画	事業実施の報告/成果
①居場所事業実施 ②子ども期から若者期まで継続的に支援を行える仕組みづくり ③公民連携のパートナーシップのあり方を模索	①1 日の平均来所者数が増加傾向（約 7 名） 利用登録者数：21 名（2023.3 現在）←20 名 新規相談件数：26 件←20 件 新規登録者数：12 名←10 名　　延べ利用者数：832 名 開設から 3 年目。市の SSW や教員からの信頼が寄せられるようになった。1 日の来所者数も増え、外出企画などにも参加者が集まるようになってきた。 ②高校進学後も「みらいる」に支援を引き継ぐことで、登校継続・進路変更支援が可能になったケース等、クレスコーレ・みらいる・サポステとつながる継続支援の仕組みが機能し始めている。長岡市（11 月)、ほっとスクール希望丘（東京シューレ 12 月）の視察の際にも継続支援の仕組みには質問が集中した。 ③教育委員会主催のむさしのクレスコーレの報告会議（隔月)、不登校対策会議（隔月）に出席。次年度から不登校対策会議では、次期武蔵野市学校教育計画の策定に向けた議論も行われる予定であり、長年地域の子どもたちに寄り添ってきた立場として、子どもたちの願いを市の政策につなげていけるよう力を尽くしたい。
１０代後半年齢　フリースクール コスモ高等部（自主事業）	
事業計画	事業実施の報告/成果
①「高等部」の本格展開 ・法人独自事業として「コスモ高等部」の取組を強化 ・各委託事業での「青年前期の学びづくり」をリードする事業としていく ②「学校外学修の単位認定」の制度をさらに研究 ③中軸となるプログラム（カリキュラム）の開発 ・実際の出会いや経験をいかしたリアルな学びを展開･研究していく ④諸団体との連携や共同研究の推進	①2022 年度新たに 4 名が加わり、７名メンバーでスタートした。その他にも「高等部プログラム公開日」には年間で１０名を超える若者が参加。一定の人数がいることで高等部としてのプログラムに幅が出てきた。２名が高等部から高校を卒業。「次」を視野に入れてそれぞれ動いている。 ②私立広域通信制高校に複数校アプローチしてみたが、各校とも当該制度を大幅に利用する意識はなく難航している。フリースクール運動の側で状況や方向性を共有し、制度利用の方向性を考えていきたい。 ③プロによるデザイン講座、古代米の栽培や関わる人たちとの出会い、広島へのスタディツアー、継続的なゼミ活動から報告冊子の作成、諸セクションが混ざり合っての「リレーマラソン」等、「高等部」としてのプログラムが本格的にスタートした。また、コスモや学習センターとのコラボもプログラムベースで徐々にはじまってきている。 ④ＪＹＣ三多摩集会をきっかけに、エルムアカデミー(品川)やムーンライトプロジェクト(埼玉)と「十代後半に必要な学びとは何か」を考え合う関係を構築。今後、研究と運動の両面で充実が求められる。

②ソーシャルファーム事業

髙橋薫

風のすみかでカフェを運営するという構想を展開することができた。三鷹市内の「野の」との協同で成立した「すみかふぇ」は、地域の交差点的な場となるような、より発展的な展開と言える。また、DTP ユースラボも基礎自治体からの受注を増やし、東京都ソーシャルファーム認証事業所への手続きも進め、足場を固める年となった。

事業実施の成果

ベーカリー「風のすみか」の若者が中心となり、市民が立ちあげた合同会社「野の」のシェアキッチンをお借りし、カフェ「すみかふぇ」をスタートした。早速、三鷹駅前商店会など地域のこれまで関係をつくれてきていないような方々との接点が増え、活動する若者にとって刺激的な場となっている。

DTP ユースラボは、チラシ、名刺、パンレット、冊子、書籍、ホームページ、動画などの制作を行いながら、一般競争ではなく社会的連帯経済によって支えられる働き方を追求している。メンバーはサポステ出身の 4 人とデザインスタッフ 1 人、サポートスタッフ 1 人の 6 人。東京都ソーシャルファーム認証事業所となるべく手続きを進めつつ、武蔵野市を中心とした基礎自治体からの受注を大幅に増やした。地域や協同ネットとの関係の深い事業所等からの受注と併せて、メンバーにとって顔の見える関係が広がった。また、全国若者・ひきこもり協同実践交流会 in 東京三多摩の分科会でメンバーが登壇し、ソーシャルファームの展開に向けて交流する関係も広がった。ちなみに、大会当日に配布された資料集および会場デザインも担当した。

高等部デザインプログラムも実施した。（2．①フリースクール事業参照）

（2）武蔵野エリア事業

①武蔵野事業

丸山直理

若者の社会参加、社会づくりをともに考える地域資源との連帯・協同を進め、発信していくことで、自分らしく生きていく方向性を模索するための社会資源モデルの構築を目指す。とりわけ、武蔵野市との連携により若者の「移行期」を支える仕組みづくりをより深め、モデル構築に向けた模索を一層進めていく。

1．若者の「移行期」を支える仕組みづくりの追求・モデル構築	
事業計画	事業実施の成果
①　義務教育後をカバーする制度や資源の必要性の可視化と発信	①武蔵野市若者サポート事業「みらいる」は、今年度教育委員会からの紹介も増大し、武蔵野市民だけで登録が 50 名を超えた(総数は 70 名強)。活動日を仕様に沿った週２日に縮小したものの、個別相談が多く寄せられ、庁内の期待の強さが窺える。教育相談や障害者福祉課とのカンファレンスなど密な連携も行うことができたが、新たに本事業を支える庁内の体制強化について行政側から提案があり、新年度は子ども家庭支援センターと３ヶ月に一度の実務者会議を行うことも決定している。また、予算増額への試みも開始しており「みらいる」再出発５年間の運動の成果だと考えている。 　一方で今年度は活動の充実もはかってきた。コスモ高等部やサポステ十代層のメンバーと合同で学びの場作りを展開した。メンバーのニーズに合わせつつ、職員も大いに仕掛けを作りながら、広島スタディツアー、ゼミ活動、デザイン講座、スポーツなどのプログラムが実現した。法人自主事業の充実を期して、コスモ高等部「プログラム利用会員」制度も開始し、若者の学びの場づくりを今後も強めていく。
②　具体的なケースを基に進める、自治体と協同し一体となった若者支援事業の運営と包括システムの追求	②今年度、武蔵野市生活福祉課（ひきこもりさサポート事業「それいゆ」）と児童青少年課（若者サポート事業「みらいる」）との合同会議が４回開催され、ケースカンファレンスで若者の困難さの共有やさまざまな連携の必要性を確認できた。同時にその会議で、年２回実施される若者サポート推進会議のテーマ設定を行う役割を担うこととし、市の若者支援を行政と協働して進めていく基礎固めをした。 　さらに、年に４回開催の総合支援調整会議に１年ぶりに参加できることなり、高齢の親世代と住んでいる若者のケースを行政と検討していく糸口ができた。尚、今年度は、初めて第六期長期計画関係団体意見交換会に生活福祉課からの提案を受け出席。広報や困窮者事業との連携の他に、子ども期～青年期を支える武蔵野市の３事業の施設自体が、競争入札の不安定なサポートステーション事業上に成り立っているため、実際の事業経費を含め、持続可能な事業運営となるよう、具体的な提案を行っている。
③　若者をとりまく課題を乗り越え	③中道通り商店会との共催イベント『茶話会』を WEB マガジンで発信することは、今後も継続で坂井会長とも話がまとまっており、文字通り地域と若者の出会いの機会をつくるツールとなっている。そして、年度

る取り組みの可視化と作品化	内に作品化までは進められなかったものの『すみかふぇ』の立ち上げに関わる若者の発信や、『ユースラボ』の若者たちが手掛けた仕事の発信、さらに『十代後半の来所データ』等、通信で報告していたものを敢えてSNS 上で発信したことで、周辺地域や学校関係者などから反響も多くあり、周囲の関心の高さが再確認できた。

・2022 年度　①むさしの地域若者サポートステーション
②武蔵野市ひきこもりサポート事業
③武蔵野市若者サポート事業
実人数　569　人、総利用件数　5976　件、就職等率　86.4%

②ユースジョブワークショップ事業

髙橋薫

三鷹地域を基盤とした取り組みを通して、若者の社会参加、社会づくりをともに考える地域資源との連帯・協同のベースづくりが進んだ。量り売りの店「野の」との出会いは象徴的で、「野の」のネットワークの中で「風のすみか」のメンバーのカフェの挑戦もはじまった。足元の地域には、まだまだ若者とともに生きていく社会づくりを展望していける人やネットワークがあるということが実感できる年となった。

事業計画	事業実施の成果
①　ひらかれた出会いと学びの場づくり	居場所 Link の若者自らが外に出かけ、地域とかかわり出会う取り組みを行うことで、武蔵野市エリアのつながりが深まった。 ・「となりのパン屋」では高齢者宅にパンを配達するばかりではなく、地域包括支援センターや高齢者施設への出張販売で多くの高齢者と直接ふれあう体験を継続して行った。 ・「七福神めぐり」「防災祭り」などの商工会議所や商店会のイベントが再開し、運営の一端を担う活躍ができた。 ・武蔵野市ひきこもりサポート事業のフォーラムでは、上記の一連の取り組みの報告を行い、地域で若者が活動する意義を地域市民に発信する機会となった。
②　ソーシャルファームを活用した義務教育後の学びプログラムの追求	コスモ高等部のプログラムとして、デザインプログラムを週 1 回のペースで 2 クール実施した。 ・デザイナーとの出会いを丁寧につくりながら、デザインに関する興味関心を重ねていく 1 クール目。 ・参加者一人ひとりのイメージを膨らませ作品化する 2 クール目。4 月頭には高等部展示会にて展示した。

	（※２．①フリースクール事業報告参照。）
③　地域の人々との協同による地域に根差した活動拠点の創出	三鷹地域の方々との市民ベースのかかわりが広がった。 ・9 月から 6 回にわたり開催された、まちづくり仕事おこし講座「働くこと再発見・三鷹でつくる協同労働（協同総研主催）」に若者とともに参加した。 ・1 月 28 日には「市民から立ちあげる共生社会」と銘打ち自主フォーラムを開催し、地域共生社会の在り方を学び合う機会となった。その後も講座の参加者との学び合いの会が継続して行われている。 ・三鷹・武蔵野地域を中心とした市民との交流の場（コモンズ in みたか・むさしの）には、担当部署にかかわらず複数のスタッフが参加した。これまで複数回行われており、地域で活動する方々との出会いや学び、交流が生まれた。
④リアルな働く体験の場の拡張と出会い・学びの創造	既存のネットワークを活かして体験の場を拡張した。 ・合同会社「野の」との連携により、風のすみかの若者が「すみかふぇ」をスタートした。（※１．②ソーシャルファーム事業報告参照） ・DTP ユースラボが東京都ソーシャルファーム認証事業所となるべく、手続きを行った。また、武蔵野市をはじめとする基礎自治体からの受注を増やした。（２．②ソーシャルファーム事業報告参照） ・ねりまサポステの中心的資源である株式会社光栄商事をむさしのサポステのメンバーも体験先として活用させていただいた。

③西東京事業

髙橋薫

2008 年度からの西東京市とのパートナーシップにより、居場所事業「We」を活用した中 3 から 29 歳の移行支援ネットワークづくりを、教育・福祉（生活保護・生活困窮）との連携により積み重ねてきた。昨年度は、地域活動との接点を居場所活動のなかでも意識し、市が主催するイベントではじめて We を広くアピールする機会も設けることができた。また、若者たちもボランティアに参加するなど活動の広がりを見せた。

事業実施の成果

居場所メンバー間の自治が成立するようになるにつれて話合いの場が多くなり、居場所の外に関心を広げるメンバーも増えてきた。結果的に、ニローネ合宿の実施やリレーマラソン参加など、日常から一歩踏み出した活動も実施することができた。

また、週3日の居場所開所のうち、1日を田無庁舎の隣のスペースで実施するようになり、「目に見える」居場所となったことにより、地域の活動家と出会う機会もつくることができた。不登校の居場所「ぽくるーむ」、若者の学習支援および住居支援「猫の足あと」、子ども食堂「わいわいキッチン」、その他地域活動のボランティアに多くの若者が参加している。そして、西東京市主催の「ともに生きる！まりづくりフェス」で「若者グループ We」として参加した。はじめて広く市民向けに発信されたイベントで、高齢・障害・学生・若者などの分野を越えた市民活動家との出会いにもなった。

西東京市ひきこもり・ニート対策事業

実人数　87　人、総利用件数　2271　件

（3）練馬エリア事業

大内佳和

「子どもから若者まで切れ目ない支援」を目標に、地域教育から就労までを支える練馬区での支援基盤を確立する。練馬区各地のあらゆる世代のための居場所が連携し、それに行政、関係機関、学校、企業との共同体制を築くことにより、地域教育から就労までを支えるしくみを構築する。

事業部全体	
事業計画	事業実施の成果
①居場所運営のノウハウの共有を促進する	①「子どもから若者まで切れ目ない支援」を目標に、居場所支援事業（ぱれっと）、子どもの居場所づくり支援事業（訪問支援＋居場所支援拠点アンサンブル）、ねりま若者サポートステーション・練馬区若者自立支援事業の各事業を練馬区内で展開しつつ、担当する各職員に対する研修も精力的に行い、協同ネットで営んできた教育活動内容などの事業の理解を深めることができた。合同企画イベントは、月に1回の頻度で開催し、居場所における教育的な価値や意義を共有する有意義な機会となった。 今後は職員の研修と合同企画イベントを継続しながらも、職員合同研修の機会を増やし、各事業の職員が新たな合同企画を提案・実施できるような雰囲気作りをすすめていく。
②社会へのわたりを支える青年期の学び	②10代後半から20代前半の若者たちが集い、社会参加や就労支援の場に緩やかにつながっていくための居場所である「プラネット Z」を、2022年度も定期的に開催した。「プラネット Z」は、居場所支援事業

	「ぱれっと」・子どもの居場所づくり支援事業「アンサンブル」・練馬区若者自立支援事業「居場所」、ねりま若者サポートステーションのスタッフが連携し、2 年間継続した。2022 年度はその成果が現れ始め、10 代後半からの若者たちの居場所として「プラネット Z」が認知され始めている。今後は、若者たちが社会参加していくために、社会的資源との連携や共同企画を考えていく必要がある。 　アンサンブルでは、2021 年度末で活動の主体となっていた層が卒業した。やりたいことをスタッフに伝えるものの受動的なメンバーの様子があったため、居場所内の掲示板に自分の「やりたいこと」を記しそれに賛同したメンバーが参加できる仕組みをつくり、自分が主になって関わっていると実感できるよう一緒に企画をつくる体験の積み重ねをしていったことで、徐々にメンバーが主体的に動くように変化していった。また、高校生世代が様々な人の話を聞く企画「高校生ハロワ」を通じて、身近な存在である卒業生から進路選択体験について話を聞いたり、興味を持った区内の会社経営者にインタビューをしたりした。高校生世代のメンバーらが、コロナ禍に実現できなかった地域ボランティア（子ども食堂、高齢者向け e スポーツサークル）に参加し、居場所外で顔の見える関係性が築かれてきている。
③練馬区内の子ども、若者支援団体とネットワークづくり	③練馬区内には多くの子ども・若者支援団体が存在する。それらとのネットワークづくりを進めており、2022 年度もそれらの機関と協力しながら若者支援を行ってきた。しかしながら、個別のケースでの協力が多く、具体的な共同会議などを行う機会は少なかった。今後はさらに協力体制を深める必要がある。 　また、コロナ禍の沈静化が進むにつれ、徐々にボランティア、地域行事の開催が回復してきた。それぞれの居場所においても、積極的にボランティアや地域行事への参加を行った。サポステと居場所が所在する練馬区春日町町会や春日町図書館とのつながりが深まり、2023 年度もさらなる連携と発展が見込まれている。 　また、サポステにおいては、企業見学会、職場体験の受け入れ可能な事業所数も回復してきた。2020 年度に始めたねりまサポステ主催の合同企業説明会を 2022 年度も 2 回開催し、ねりまサポステの利用者だけではなく、他のサポステの利用者や練馬区内の他機関の若者も参加した。合同企業説明会は様々な支援機関に周知され、ねりまサポステの恒例行事として浸透している。参加した企業からも、「若者を雇用するための勉強として参加している」という感想があるなど、とも

	に若者を育てていく連携関係を築く手助けとなっている。今後は、就労ネットワークや中小企業家同友会との連携を強化していく。

2022 年度実績

① 子どもの居場所づくり支援事業（訪問支援＋居場所支援拠点アンサンブル）

実人数　146　人、総利用件数　2721　件

② ねりま地域若者サポートステーション

実人数　358　人、総利用件数　3355　件、就職等率　65.3%

③ 若者自立支援事業「居場所」

実人数　115　人、総利用件数　2155　件

（4）相模原エリア事業

報告者　雨宮 健一郎　矢盛晶

相模原市より委託を受け、2010 年から実施運営している勉強会事業の有用性を追求するため、居場所事業との一体化を進めた。その中で年々生徒数が減少する勉強会事業の意義や目的を再設定する必要性を強く感じた。サポートステーション事業では「雇用上手プロジェクト」がより本格的に動き出し、若者たちを受け入れる企業の増加や連携が広がった。

内側の進路を育む場づくり	
事業計画	事業実施の成果
『内側の進路を育む場づくり』をスローガンとし、さまざまなヒト・モノ・コトとの出会いのある体験を積み重ねていくことで、改めて人や社会、そして自分自身への信頼を回復していける場づくり。	今年度のスローガンの到達点の一つとして象徴的だったのが、居場所コローレの活動報告会で登壇し語ってくれた若者たちの言葉である。 「本気で人と向き合う事の楽しさを知った」「高校を退学し、編入を決断できたのは、何かあってもコローレに戻って来られるという安心感があったから」「コローレとは自分を変えてくれた場所。めちゃくちゃ世界が広がった」など、それぞれが居場所での多くの出会いを通して学び得たことを語ってくれた。これは場や他者、そして何よりも自分自身への信頼感を回復し、主体的に生きていく力を獲得ていくプロセスであると感じてる。
居場所／勉強会の展開	
事業計画	事業実施の成果
①地域に根差す若者のよろず相談窓口・若者のプラットフォーム構想	①今年度も引き続き多くの関係機関からの利用相談や、地域から若者への協力依頼などがあった。特徴的だったのが、中学 3 年生で進路未決定のまま卒業を迎えた状態の若者が駆け込みで子育て支援センターや児童相談所から相談が来たことだった。

②義務教育年齢から関わる切れ目のない支援	そして、地域で開催されている高齢者の集うサロンをはじめ、自治会や社会福祉協議会の主催するイベントからも多くの誘いを頂き参加した。他にも毎年恒例となっている商店会のカレンダーを相模原の 4 居場所が手分けしてポスティングするなど、以前から続く商店会との連携も続いている。 ②市立中央中学校で展開している教室へ通う事に不安のある生徒を主な対象とした「つじちゃんの部屋」では、昨年度に比べ利用する生徒が大幅に増加した（R3 年度：実人数 6 名/延べ人数 95 人　R4 年度：実人数 13 名/延べ人数 154 人）。更には別教室を利用するなど、活動範囲も広がってきた。また、津久井高校のカフェでは三年間カフェに通い続けた生徒たちが卒業式の日に「カフェのあった木曜日が楽しみだった。」「木曜日だけはサボらないで学校へ行こうと思えた。」と通学意欲に繋がっており、中退防止にも寄与していたことを語ってくれた。そして厚木清南高校では、前年度カフェを利用していた生徒がサポステにつながり、卒業後のアフターフォローを行ったというケースもあった。 若者自立サポート事業 実利用者数：482 名　延べ利用者数：6750 人 子ども健全育成事業 実利用者数：44 名　延べ利用者数：505 人
さがみはら若者サポートステーションの展開	
事業計画	事業実施の成果
① 居場所機能の拡充 ②「居場所ホッと」	①若者同士が出会い学ぶ場づくりを目指し、サポステと居場所ホッとを横断するための仕組みづくりを行った。若者がサポステからホッとへ段階を経て繋がるように、サポステ内でのロビーワークから少集団をつくり、そこから「ホッと見学会」等を行い、スムーズにホッとへ繋いだ。また、従来の個別面談のみでは対応が難しい若者には、スタッフ複数体制での面談実施や、趣味嗜好が似通る若者同士を意図的にロビーで出会う機会を作ることで若者の集団化が生まれた。ただし、サポステ内ロビーの居場所化が定着すると、次にはロビーワークのみに滞留する若者が生まれており、スムーズに居場所ホッとの利用に促すかが課題である。上記の成果として居場所ホッとの利用者数が今年度急激に増加したが、居場所の定員がオーバー気味である。そのため、出口支援の強化は今後も継続して実施していく。 ②③今年度も地域企業と密に連携を行った。特に、相模原青年会

とニローネの連携による協力企業の開拓 ③多様な出口戦略の展開	議所との連携では「雇用上手プロジェクト」が、今年度から相模原市と青年会議所が提携を結び、実施団体としてサポステが運営する形となり実施した。その結果、年間 4 回の定期的な開催が実現し、参加企業は年間 20 社、職場体験の年間参加者は 28 名に至った。参加企業からは「自分たちの会社を見つめ直す機会になった」と意見があり、雇用上手の目的である若者の就労可能性の拡大だけでなく、企業の雇用力・教育力の向上にも繋がった。また、雇用上手に参加した企業で職場体験を継続して実施した若者もいた。今後、雇用上手から中長期的な職場体験を経て、体験先企業での雇用へとスムーズに移行する流れに繋げていくことで、従来の履歴書や面接を中心とした選考方法でなく、多様な出口戦略も作っていく。 「居場所ホッと」とニローネの連携は行ったが、企業との協力関係を築くことは難しかった。今後もアジサイメイツ等にアプローチを行いながら協力企業の開拓を行っていく。 さがみはら地域若者サポートステーション・若者サポートステーション事業 実人数：536 名　延べ人数：2876 人　就職等率：70%

（5）中野区若者フリースペース事業

田中亮太

新たなエリアでの事業初年度は、あらゆる面での土台づくりでした。6 月の事業開始から 10 か月間、若者たち・地域・中野区と共に考え活動をつくってきた中で、中野の若者居場所の文化が少しずつ芽生えてきたと感じます。「まごころドーナッツ」という愛称が決まり、3 月には活動報告会を実施することができました。

不登校やひきこもり状態の人はすぐには来られないだろうと予想していましたが、実際につながった若者たちは、サポステ利用者層とも重なる社会につながろうとする層の他に、就労中の人や大学生などもおり、所属のある若者でも居場所や交流を求めていることが見えてきました。居場所の少なさは、一部の人だけの話ではなく現代の多くの若者たちの生きづらさなのかもしれません。

中野区担当課との関係構築が進み、定例の運営会議や個別のケース会議といった連携の基盤ができました。区内関係機関と顔の見える関係づくりも進んでいます。学校との連携については、まだこれからと感じます。地域との連携においては、区民活動センターや近隣の町会、中野区社会福祉協議会とつながり、地域のイベントに若者たちが参加しました。活動周知の機会にできたと同時に、参加した若者にとって貴重な社会体験の場となりました。

法人内の連携としては、練馬と武蔵野の若者居場所が行うスポーツプログラムや、ねりまサポステ主催の合同企業説明会に参加しました。その後サポステ登録に進んだメンバ

ーもいます。また、DTP ユースラボの力を借りて HP 開設やリーフレット制作をし、広報の中心的ツールとしました。

実利用者数：23 名　延べ利用者数：789 名

（6）事務局

廣瀬貴久

本年度は三鷹・武蔵野の様々な地域課題を学んだり、新しい地域での働き方について事例を基に学び合うなど三鷹・武蔵野地域を中心に市民や団体との学習や交流の機会をつくり新たな地域ネットワークづくりに力を入れて取り組んだ。その中で懸案だったベーカリーすみかのカフェを三鷹駅前に出店することができた。合わせて三鷹の学習会を基軸にして外国人支援団体やみたかボランティアセンター他、子どもたちをサポートする市民団体との協働を進めてきた。また中野にて若者の居場所を新規に立上げ、武蔵野、練馬、相模原、サポートステーション事業など 7 つの実施事業のプロポーザルや入札を行った。また全国若者・ひきこもり協同実践交流会が国分寺で行われることから交流会の実行委員会に複数の事務局員が参加し尽力した。

2022 年度実績
すみカフェ出店、新規事業採用 1（指名入札）、助成金申請 1 件採用
更新プロポーザル 4 つ採用、更新入札 3 つ落札、

具体的な取り組み
三鷹（武蔵野）市民ネットワーク

- 上連雀無料学習会　毎週火曜日　8/2 品川水族館見学 1/17 映画会 3/28 上野動物園見学
- コモンズ@三鷹・武蔵野
  5/9 第 2 回コモンズ三鷹・武蔵野　6/22 三鷹市コミュニティースクール
  7/27 建築から見る人・イエ・まち　8/31 西東京でのシェアハウス実践
  10/5 武蔵野市子どもの権利条例　12/7 外国人ルーツをもつ子どもの支援
- 働くこと再発見（三鷹でつくる協働労働）9/14、28、10/12、26、11/9、30
- 多世代交流センター研修会　5/20
- みたか親の会発足式　5/21
- もぐもぐ食堂　牛乳引き取り 4/9、15、28
- 三鷹ひきこもり支援者連絡会　6/23、7/20、9/2、22、10/12,12/5、1/25
- ひきこもり合同相談会　9/23
- 三鷹市民活動ミニフォーラム（事務局協働センター）　5/2，6/10、7/15、1/26

・　NPO フォーラム実行委員会　（事務局協働センター）7/4、21、8/5、9/7、10/14
・　だんだんラボお手伝い　10/5,11/2,12/7、1/4、2/1、3/1
・　巣立ち会 講演会参加　11/5
・　三鷹未来塾 視察　11/8

総会、理事会、研修会

・　理事会 5/1　理事会・総会 6/19
・　生活困窮世帯支援研修会 とその準備　9/8，10/1
・　10/27 サポステ OBG 調査報告会　10/27
・　協同ネット全体研修会「共生と自治への社会教育的アプローチ」1/28
・　第 17 回全国若者・ひきこもり協同実践交流会 in 東京三多摩 2/18,19
・　子ども未来フォーラム研修会参加 2/27，28

事業の立ち上げ・更新

・　中野企画書会議 4/7　中野事業プレゼン 4/15　中野運営会議 5/11、16、19
・　相模原 2 事業プレゼンテーション 3/2，5/19
・　中野予算会議 8/29
・　ソーシャルファーム会議 10/24,11/14、2/6、3/9　認証プロポーザル 3/23
・　上連雀無料学習会助成金申請 11/29
・　すみカフェオープン 1/11
・　サポステ入札対策会議 1/12 サポステ提案書作成会議 1/19
・　武蔵野市学習支援検討会 2/10　プロポーザル 2/13
・　すみカフェ会議 2/27
・　認定 NPO 現地審査 3/29

地域等に活動報告

・　三鷹 NPO フォーラム　ミニ交流会にて上連雀無料学習会活動を報告 5/2
・　武蔵野市ひきこもりサポート事業フォーラム
　10 月 8 日(土)「なぜ地域との関わりが大切なのか」
　3 月 18 日(土)「ひきこもりから居場所、そして社会へ」
・　中野活動報告会「ここから！まごころドーナッツ」3/15
・　練馬活動報告会 3/18
・　相模原居場所「コローレ」活動報告会 3/24
・　不登校の居場所「ぱれっと」活動報告会・節目の会 3/29

講師派遣、視察対応等

・　東京都ひきこもりに係る支援者向け研修講師 7/29
・　ボランティア養成講座＠市民活動フォーラム 9/21
・　ダイバーシティプロジェクト・就労支援スタッフ養成研修講師 11/22
・　社会福祉法人経営者研修会講師 12/23

- シンポジウム「ともに働く」ことをひろげる~東京都ソーシャルファーム条例を検証する～（主催：ソーシャルファームを考える会）登壇 1/7
- 東京都支援者研修会講師 2/16，22
- 西東京市地域共生シンポジウム（主催：西東京市地域共生課）に登壇 3/4
- 文科省コスモ視察 3/7

経理事務

- 各事業の清算と見積の作成
- 東京都への財務諸表等の提出